

Check it out!
誰かに教えたいくなる
カルチャーインフォ

THE FACE

今月の「顔」

FILM SURFER

映画私上主義

READING FIGHTER

魂の一冊仕事人

GLOBAL LISTENING

和洋中的音楽案内

「私は生涯サルトリアでありたい」



モデルかと思えるスタイリッシュな感じである。口調は静かでとても上品。今回の取材ではいろいろ教えられた。問い合わせ先：ラフィネリア TEL.03:5772-2426、www.raffineria.net

取材は、西麻布にあるラフィネリアで行われた。優しい瞳と上品な挨拶、すきのない身だしなみに「瞬間葉がでず、遅れながら「どうもこんにちは」と言っていました。せっかくならイタリア語の挨拶を昨日覚えたのに。参った。ガエターノ・アロイジオ氏。1963年イタリア・カラブリア生まれ。わずか22歳でフォルビチ・ドーロを受賞、90年独立して現在ローマにアトリエがある。サルトリアとしては

年齢は若い。職歴は輝かしい、プロ中のプロ。顧客もセレブが多く、すごいひとなのである。「子供のころから服が好きで、どうしたら人にかっこよく見えるだろうと考えていました。それが高じて自分で洋服を作ることに興味をもったんです。いまでは、自分がというよりも、いつも、ゲストのことを考えています」と、この仕事について理由を教えてください。

今回は、初来日。ラフィネリア、ザンブリンハウス、信濃屋元町本店の3店舗で氏のオートデータ会が行われた。スーツ好きにはうれしい受注会である。予想通りかなり盛況であったようだ。初めて日本を訪れた印象を聞くと、「まず、日本という国に関しては、近代的な発展に驚くとともに、同時に伝統がしっかり守られている素晴らしい国と感じました。また日本人の方にもとても興味を持ちました。間

違えないようにしっかり時間をかけ、正確に判断するところがです。決断時には、その物をしっかり理解していただける。本当にサルトリアに付きまします。また日本に來たいです」と語った。

イタリア人サルトリアとしては、珍しく顧客1人1人の型紙を布で作成する方法をとっている。

「サルトは、デザイナーと違います。デザイナーはモードを創造する仕事です。ですから相手は、時代。しかしサルトはゲストの個性を引き出す仕事です。この部分が私がこの仕事に魅力を感じているところなんです。生涯サルトでありたいと思います」

仕事への姿勢を教えてください。「今後は、さらにもっと多くのひとに私の服を着てもらうため、どうしたらいいか色々考えています」

実際に新しい素材の研究や地方の伝統の復活など研究している。

言葉の中からサルトリアであるというプライドが感じられる。仕事に関してなかなか自信が持たない時代、氏の態度はうらやましくも思える。

短い時間だったが氏の言葉が心にしみた。イタリアでも仕立て屋、既製の会社、デザイナーと混乱しているようだ。そしてサルトが減っている現状と聞く。だからこそ、その状況にあって仕事へのこだわり、情熱、愛情はすばらしいことである。

今回のマンスリームのテーマである、「スーツを楽しむ」という事を氏は実践し、さらに人に服を通じて教えてくれるようだ。

GAETANO ALOISIO ガエターノ・アロイジオ

(サルトリア)



がえたーの・あろいじお
1963年イタリア・カラブリアに生まれる。ミラノのサルトリア・ボロネーゼ、ローマのロツツイで修業。22歳の時フォルビチ・ドーロを受賞。その後ヘッドカッターに。90年独立、ローマにアトリエを構える。

アロイジオ氏の本日の服装はもちろん自身の作品、それにほかのアイテムも全てスミズーラ。袖口をみると細部にわたったこだわりが良く解る。ボタンの感じなど。ここに技が活きているのであろう。右は氏の作ったスーツ。みるからに着心地が良さそう。洋服を着るというよりも、上質な布に包まれるという感触なのだろう。これぞ、サルトリアの芸術と感じた。¥600,000

